

求安録

映画文学人生論

内村鑑三 (1861-1931)

『求安録』 1(887)

『基督信徒の慰』 (1880)

『余は如何にして基督信徒となり乎』 (1901)

参考：正宗白鳥『内村鑑三』 ()

世に生れざるこそ最も大いなる幸運なれ

若き日の正宗白鳥が読みふけり、深い影響を受けた書に内村鑑三『求安録』がある。

「私は青年時代に内村の作品を読んで、「いかに生くべきか」を感得するつもりであった。あの時分の文筆業者で如何に生くべきかに思ひを注いだものは無かったやうである。内村は兎に角それを狙ってゐたのだ」。

白鳥の青年時代は明治二十年代。徳富蘇峰編集の『国民の友』や、北村透谷、島崎藤村が同人の『文学界』も講読していたが、その中で「いかに生くべきか」を感得しようとしたのが内村鑑三からとは意外な気がする。十代の白鳥が読みつけた『求安録』を、今頃になって七十代の私が読む気にさせられたのはその意外性による、

しかし、『求安録』で次の文章に接すると。白鳥が傾倒したのもそれほど意外ではないと思う。「ダンテと共に三界に遊び、沙翁に由て人情に達し、ゲーテに導かれて思想界の宇宙を跋涉する時、我は下界の人ならず、我は我より解脱して、真聖人となりし感あり」。

ダンテ、沙翁（シェイクスピア）、ゲーテといえ、偉大な文学者として誰もが名前を知っている。『神曲』『ハムレット』『ファウスト』などを讀んだことのある日本人は今少ないだろうが、札幌農学校卒の内村鑑三は讀んで下界の人ならぬ真聖人になった感があるとさえいう。



求安録

映画文学人生論

正宗白鳥はどうか。彼は内村の影響で『神曲』や『ファウスト』を読んだ。早稲田大学の前身の東京専門学校では坪内逍遙の元で英文学を学んだから、もちろん沙翁も読んでいる。

しかし、正宗白鳥は内村鑑三にそむいたため、真聖人にはなれなかった。彼は「いかに生くべきか」というよりむしろ「いかに死すべきか」を考え続けたが、それでも文壇生活六十年を大過なく過ごし、八十三歳で死んだ。

津ね夫人の『病床日記』によれば、白鳥は死の一週間前に、「わしの父は手術もせず餓死したのだ。ソクラテスは生まれて来たのが最悪。生まれたらすぐ死ぬのが幸いだと言った」などと云ってロレッツがまわらなくなったという。

ソクラテスがそんなことを云うはずがないと気になってしたが、『求安録』で疑問がとけた。

「世に生れざるこそ最も大いなる幸運なれ。其の次位の幸福は成るべく速く之を離れ去らんことなり」とソフォクレスが言っているという。ソクラテスではない。

白鳥は老衰していたともいわれているので、ソクラテスとソフォクレスを言い間違えたのかもしれないが、夫人が聞き間違えた可能性もある。いずれにせよ、若い頃の読書で感銘を得た言葉が死の一週間前に記憶の底からよみがえったようだ。

口あいて腸（はらわた）見せる石榴かな 芭蕉